



Poco ZEFIRO

カトリック桂教会 広報紙

Vol. 12
2019年クリスマス号

編集・発行
カトリック
桂教会広報部

教皇様訪日特集号

良い知らせを伝えます!!

クリスマスおめでとーございます。

担当司祭 アントニオ・カマチヨ

イエス様の誕生日のお祝いを毎年行いますが、私たちには大きな意味があります。

確かに大きなお恵みをいただきます。ですから、その喜びを多くの人と分かち合うべきです。

皆さんの中には、家族に子どもが生まれた体験をした事がある人が大勢おられると思います。それは大きな喜びですね。

あるいは、この社会の中で毎日いくつかのお店や会社が生まれていますが、開店準備や会社の設立登記が出来上がるまでには沢山の準備が必要です。しかし、オープンの際には大喜びですね。

また、全然知らない人と出会って友達になると、その人との楽しい時間の過ごし方を探して、喜んで会いに行きます。それから新しい道を歩みます。それは喜びに繋がります。

まして、クリスマスの時にイエス様がお生まれになりますから大変な喜びですよ。イエス様がお生まれになったからこそ【いのち】を頂きました。だから感謝するべきです。けれども、私

たち信者だけではなくて、イエス様を信じない人のために、又、全世界のために、イエス様がお生まれになりましたから、その喜びは多くの皆さんに伝えるべきでしょう。

現代社会、家庭、学校にイエス様の平和と喜びが必要だと思えます。

この宝を私たちの共同体はどの様に伝えたら良いのでしょうか？

私たちは何をすれば良いのですか？

桂教会の共同体の皆さん、私たちはイエス様の光と喜びを伝えることが使命です。大いに宣教しましょう!!



教皇フランシスコ 日本を司牧訪問

東京ドーム・教皇ミサに参加 古澤 吉次



教皇フランシスコが11月23日から26日の4日間に日本を訪問されました。教皇様の日本訪問は教皇ヨハネ・パウロ二世の日本訪問以来、38年ぶりになります。

日本政府は、この機会に今までの呼称を従来のローマ法王、法王庁から「ローマ教皇、教皇庁」に改め、即日実施の旨を公報で通知しました。

カトリック関係者は、呼称「教皇」に改められたことに小さな安堵を覚えることになったのではないかと思います。教皇様は日本司牧訪問中、11月24日長崎および25日東京におけるミサおよびスピーチを通して、テーマ「いのちと平和を守るために」を一貫して、核兵器のない世界は可能、核の平和利用は現実離れ、弱者・障がい者を排除することがあってはならない、教会はあらゆる人びとを受け入れるように・・・と具体的に行動に移すよう呼びかけました。

長崎と東京で延べ合計約8万人がミサに参加しましたが、教皇様からの励ましを受け、その良き余韻をこれからの信仰生活に生かしたいとひそかに誓った方も多いのではないのでしょうか。

【東京ドーム教皇ミサにおける

教皇様説教の全文】

2019年11月25日

今聞いた福音は、イエスの最初の長い説教の一節です。「山上の説教」と呼ばれているもので、わたしたちが歩むよう招かれている道の美しさを説いています。聖書によれば、山は、神がご自身を明かされ、ご自身を知らしめる場所です。神はモーセに、「わたしのもとへ登りなさい」（出エジプト24・1参照）と仰せになりました。その山頂には、主義主義によっても、「出世主義」によっても到達できません。分かれ道において師なるかたに、注意深く、忍耐をもって丁寧聞くことよってのみ、山頂に到達できるのです。山頂は平らになり、周りがすべて見渡せるようになり、そこはたえず新たな展望を、御父のいつくしみを中心とする展望を与えてくれるのです。イエスにこそ、人間とは何かの極みがあり、わたしたちの考えをことごとく凌駕する充滿に至る道が示されています。イエスにおいて、神に愛されている子どもの自由を味わう新しいのちを見いだすのです。

しかし、わたしたちはこの道において、子としての自由が窒息し弱まるとき

があることを知っています。それは、不安と競争心という悪循環に陥るときです。息も切れるほど熱狂的に生産性と消費を追い求めることに、自分の関心やエネルギーを注ぐときです。まるでそれが、自分の選択の評価と判断の、また自分は何者か、自分の価値はどれほどかを定めるための、唯一の基準であるかのようになります。そのような判断基準は、大切なことに対して徐々にわたしたちを無關心、無感覚にし、心を表面的ではかないことがらへと向かうよう押しやるのです。何でも生産でき、すべてを支配でき、すべてを操れると思ひ込む熱狂が、どれほど心を抑圧し、縛りつけることでしょうか。

ここ日本は、経済的には高度に発展した社会です。今朝の青年との集いで、社会的に孤立している人が少なくないこと、いのちの意味が分からず、自分の存在の意味を見いだせず、社会の隅にいる人が、決して少なくないことに気づかされました。家庭、学校、共同体は、一人ひとりが支え合い、また、他者を支える場であるべきなのに、利益と効率を追い求める過剰な競争によって、ますます損なわれています。多くの人が、当惑し不安を感じています。過剰な要求や、平和と安定を奪う数々の不安によって打ちの

めされているのです。

力づける香油のごとく、主のことがばが鳴り響きます。思い煩うことなく、信頼しなさい、と。主は三度にわたって繰り返し仰せになります。自分のいのちのことで思い悩むな、・・・明日のことまで思い悩むな（マタイ6・25、31、34参照）。これは、周りで起きていることに関心をもつなどいつているのでも、自分の務めや日々の責任に対していい加減でいなさいといっているのでもありません。それよりも、意味のあるより広い展望に心を開くことを優先して、そこに主と同じ方向に目を向けるための余地を作りなさいという励ましなのです。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」（マタイ6・33）。

主は、食料や衣服といった必需品が大切でないとおっしゃっているのではありません。それよりも、わたしたちの日々の選択について振り返るよう招いておられるのです。何としてでも成功を、しかもいのちをかけてまで成功を追求することにとらわれ、孤立してしまわないようにです。世俗の姿勢はこの世での己の利益や利潤のみを追い



東京ドーム・教皇ミサ会場 教皇様入場を待つ参加者

求めます。利己主義は個人の幸せを主張しますが、実は、巧妙にわたしたちを不幸にし、奴隷にします。そのうえ、真に調和のある人間的な社会の発展をはばむのです。

孤立し、閉ざされ、息ができずにいるわたしに抗しうるものは、分かち合い、祝い合い、交わるわたしたち、これしかありません（「一般謁見講話（2019年2月13日）」（参照）。主のこの招きは、わたしたちに次のことを思い出させてくれます。「必要なのは、『わたしたちの現実は与えられたものであり、この自由さえも恵みとして受け取ったものだということ』を、歓喜のうちに認めることです。それは今日の、自分のものは自力で獲得するか、自らの発意と自由意志の結果だと思ひ込む世界では難しいことです」（使徒的勧告『喜びに喜べ』55）。それゆえ、第一朗読において、聖書はわたしたちに思い起こさせます。いのちと美に満ちているこの世界は、何よりも、わたしたちに先立つて存在される創造主からのすばらしい贈り物であることを。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それはきわめてよかった」（創世記1・31）。与えられた美と善は、それを分かち合い、他者に差し出すためのものです。わたしたちはこの世界の主人でも所有者でもなく、あの創造的な夢にあずかる者なのです。「わたしたちが、自分たち自身のいのちを真に気遣い、自然とのか

かわりをも真に気遣うことは、友愛、正義、他者への誠実と不可分の関係にある」（回勅『ラウダート・シ』70）のです。

この現実の前に、キリスト者の共同体として、わたしたちは、すべてのいのちを守り、あかしするよう招かれています。知恵と勇気をもって、無償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢、それらに特徴づけられるあかしです。それは、実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受け入れる態度です。「そこにあるもろさ、さもしさをそっくりそのまま、そして少なからず見られる、矛盾やくだらなさをもすべてそのまま」（「ワールドユースデーパナマ大会の前晩の祈りでの講話（2019年1月26日）」）引き受けるのです。わたしたちは、この教えを押し進める共同体となるよう招かれています。つまり、「完全でもなく、純粋でも洗練されてもいなくても、愛をかけるに値しないとでも思ったとしても、まるごとすべてを受け入れるのです。障害をもつ人や弱い人は、愛するに値しないのですか。よそから来た人、間違いを犯した人、病気の人、牢にいる人は、愛するに値しないのですか。イエスは、重い皮膚病の人、目の見えない人、からだの不自由な人を抱きしめました。フアリサイ派の人や罪人をその腕で包んでくださいました。十字架にかけられた盗人すらも腕に抱き、ご自分を十字架刑に処した人々さえもゆるされたのです」（同）。

いのちの福音を告げるといふことは、共同体と

してわたしたちを駆り立て、わたしたちに強く求めます。それは、傷のいやしと、和解とゆるしの道を、つねに差し出す準備のある、野戦病院となることです。キリスト者にとって、個々人や状況を判断する唯一有効な基準は、神がご自分のすべての子どもたちに示しておられる、いつくしみという基準です。

善意あるすべての人と、また、異なる宗教を信じる人々と、絶えざる協力と対話を重ねつつ、主に結ばれるならば、わたしたちは、すべてのいのちを、よりいっそう守り世話する、社会の預言的パン種となれるでしょう。



フランシスコ教皇訪日の公式ロゴ